

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：35309

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12085

研究課題名（和文）治療期にあるがん患者とパートナーとのパートナーシップ促進支援モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of the partnership promotion support model with patients with cancer and the partner in the treatment period

研究代表者

光井 綾子（MITSUI, Ayako）

川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師

研究者番号：90457367

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：治療期にあるがん患者とパートナーとのパートナーシップの形成プロセスをそれぞれの立場から明らかにした。患者もパートナーも相手の普段みせない言動の認知をきっかけに、互いの存在を強く認識し、新たな気づきや肯定的感情を得、パートナーシップが深まるというプロセスをたどっていた。闘病下における協働を相互に認識・実感し、共有できるような支援が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

家族員ががん罹患者は、患者にとっても家族にとっても衝撃的な出来事であり、家族内に様々な変化や困難が生じる。家族は関係性を再構築していかなければならない状況に直面し、家族の存在を改めて強く意識する。今回、がん患者とパートナーのパートナーシップの形成プロセスを明らかにすることにより、サブシステムであるがん患者とパートナーに着目した支援への示唆を得た。

研究成果の概要（英文）：The process of forming a partnership between a cancer patient in the treatment phase and a partner was clarified from each standpoint. Both the patient and the partner followed the process of deepening their partnership by recognizing each other's existence and behavior, strongly recognizing each other's existence, gaining new awareness and positive feelings. It is necessary to support each other so that they can mutually recognize, realize and share their cooperation under the fight against illness.

研究分野：臨床看護学

キーワード：パートナーシップ がん患者 パートナー 治療期

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

がんの診断や治療技術の進歩により、がん罹患者の生存期間は延長し、がんとの共生に向けた支援が必要とされている。現在、がん看護分野の研究が進み、看護ケアの質の向上が図られているものの、がん医療の発展やニーズの多様化・複雑化に伴い、取り組むべき課題は未だ多く残されている。その中でも特に、がん患者の主たる介護者である配偶者に焦点をあてた研究では、配偶者の苦悩や困難が数多く報告されている(古賀, 他, 2014)。一方、がん患者に対する配偶者介護者のポジティブな側面として、ケアを受ける人との関係性が高まることや成長の感覚、満足の認識が明らかにされている(Qiuping Li, et al., 2013)。また、がん患者と家族成員のパートナーシップが動的に相互作用すれば、がん患者と家族成員の QOL が向上することが明らかにされており、家族をシステムとして捉えた援助の重要性が示唆されている(安永, 他, 2012)。

しかし、国内外において、がん患者とパートナーのパートナーシップに焦点を当てた研究は少なく、パートナーシップを促進する支援については明らかにされていない。がん患者とパートナーとのパートナーシップは、がんと診断された時からその生を全うするまでのプロセスにおいてがんと共に生きる基盤となるものであり、がん患者とパートナーのパートナーシップの促進や強化を目指した支援は、がん患者とパートナーががんという厳しい現実に向き合い、がんとともに生きる力や肯定的感情の創出、健康問題を抱えながらの生活に適応していく力を高めたり、直面する課題や問題の解決につながると考えられる。そのため、より早い段階からのがん患者とパートナーのパートナーシップを促進する支援を検討することが重要である。

2. 研究の目的

本研究は、治療期にあるがん患者とパートナーとのパートナーシップを促進する支援の示唆を得るため、がん患者とパートナーのパートナーシップの形成プロセスを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

質的記述的デザイン

(2) 研究対象者

対象は治療中の造血器腫瘍患者とそのパートナーとした。患者の選定条件は 病名および病状の告知を受け本人が認知している治療中の造血器腫瘍患者(病期は問わない)、年齢は 20 歳以上、パートナーがいる、調査時に病状が安定している、意識障害や認知機能障害がなく、会話が可能なものとした。パートナーの選定条件は、年齢は 20 歳以上、意識障害や認知機能障害がなく、会話が可能なものとした。ただし、初回治療を受けている患者とそのパートナーは、心理的に不安定であることが予測されるため除外した。

(3) データ収集方法

診療録とインタビューガイドに基づく半構成的面接によりデータ収集を行った。面接は、入院患者は入院中に、外来通院中の患者は外来受診日に実施した。パートナーは、来院予定日や希望日を確認して実施した。面接場所は、プライバシーの確保ができる個室や面談室とした。面接時間は原則 1 回 1 時間とし、1 回のインタビューで十分な情報が得られなかった場合や何らかの理由によりインタビューが中断された場合には、2 回以上行うことを説明して実施した。

(4) 分析方法

がんの診断や告知によって、がん患者とパートナーのパートナーシップがどのように変化していくのか、パートナーシップは何に影響を受けるのかを明らかにするため、修正版グラウンデ

ッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) (木下, 2009) を用いて分析を行った。分析過程では定期的に質的研究の専門家にスーパーバイズを受け、真実性の確保に努めた。

(5) 倫理的配慮

研究者の所属する大学および研究協力施設の倫理委員会の承認を得て行った。

4. 研究成果

(1) がん患者からみたパートナーシップの形成プロセス

がんと診断・告知されることにより、患者とパートナーの間には患者-支援者関係という新たな関係が生まれ、患者はパートナーに対し、不甲斐ない思いと焦燥感を抱くようになっていた。しかし、パートナーの普段見せない言動の認知をきっかけに、パートナーとの関係性や関わりを振り返る深い省察を経て、闘病生活において生じた新たな協働に気づき、その気づきが患者の個としての成長へとつながり、患者にとってパートナーが唯一無二の大切な存在であるだけでなく、患者自身もまたパートナーにとって大事な存在であることを認識でき、パートナーとの絆の深まりを実感し、パートナーシップが深まるというプロセスをたどっていた。

患者がパートナーとの関係性や関わりを振り返る省察は、闘病により新たに生じた協働への気づきを生み出し、患者の意識変革やパートナーシップにつながることから、パートナーとの関係性に着目して支援していく必要性ならびに患者がパートナーとの関係性を省察できるような介入の必要性が示唆された。

(2) パートナーからみたパートナーシップの形成プロセス

パートナーは、がんの診断・告知によって生活が一変する大変さを実感するものの、患者の闘病の決意と医師の言動によって決意を固め、支援者としての責任感やプレッシャーを抱いていた。この責任感やプレッシャーが原動力となり、自身の生活や気持ちの調整および患者が前向きに治療に取り組める支援や情報収集を行っていた。その中で、患者の普段見せない言動の認知によって、患者が唯一無二の存在であることを改めて深く感じるとともに、支援者としてのさらなる原動力を生み出し、支援を継続していく中で患者との絆を実感し、パートナーシップが深まるというプロセスをたどっていた。パートナーが抱く責任感やプレッシャーは、パートナーシップの形成プロセスの起点となり、支援者としての原動力となる一方で、不安にもつながっていた。そして、期せずして得た情報はパートナーの不安を助長させていた。

造血器腫瘍は、病状や治療自体に馴染みがなく理解しづらいこと、治療経過が長く見通しが立ちにくいなどの特徴を有し、パートナーは先行きが見えない不安を継続的に抱え、情報収集に奔走していた。そのため、パートナーの情報ニーズの把握と確かな情報提供、病状や治療経過についての丁寧な説明や声かけが必要である。また、必要以上に責任感やプレッシャーを抱かせないよう、パートナーの心的状態を把握し支援していく必要性が示唆された。

(1)(2)より、患者はパートナーに対して感謝の気持ちを抱く一方で、迷惑をかけるだけで何の役にも立てないといった無力感を強く感じていた。パートナーは支援者としての責任感やプレッシャーを抱き、生活や気持ちの調整を行い、患者の治療生活への支援を行っていた。しかし、患者もパートナーも相手の普段みせない言動の認知をきっかけに、互いの存在を強く認識し、新たな気づきや肯定的感情を得、パートナーシップが深まるというプロセスをたどっていたことから、闘病下における協働を相互に認識・実感し、共有できるような支援が必要であることが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 光井綾子、小野美穂、細川京子、平松貴子、松本啓子、伊東美佐江
2. 発表標題 治療期にある造血器腫瘍患者のパートナーからみたパートナーシップの形成プロセス
3. 学会等名 日本がん看護学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ayako Mitsui, Takako Hiramatsu, Kyoko Hosokawa, Miho Ono, Keiko Matsumoto, Misae Ito
2. 発表標題 Sgnificance of cancer support group engagement for cancer patients and spouses
3. 学会等名 21st East Asian Forum of Nursing scholars & 11th International Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 光井綾子
2. 発表標題 造血器腫瘍患者と配偶者の体験に関する文献検討
3. 学会等名 第40回日本造血細胞移植学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 光井綾子、平松貴子
2. 発表標題 造血器腫瘍の治療期にある患者とパートナーのパートナーシップが深化するプロセス
3. 学会等名 第40回日本造血細胞移植学会総会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊東 美佐江 (Misae Ito) (00335754)	山口大学・大学院医学系研究科・教授 (15501)	
研究分担者	松本 啓子 (Keiko Matsumoto) (70249556)	香川大学・医学部・教授 (16201)	
研究分担者	細川 京子 (Kyoko Hosokawa) (40554233)	川崎医療福祉大学・医療福祉学部・講師 (35309)	
研究分担者	小野 美穂 (Miho Ono) (20403470)	岡山大学・保健学研究科・講師 (15301)	